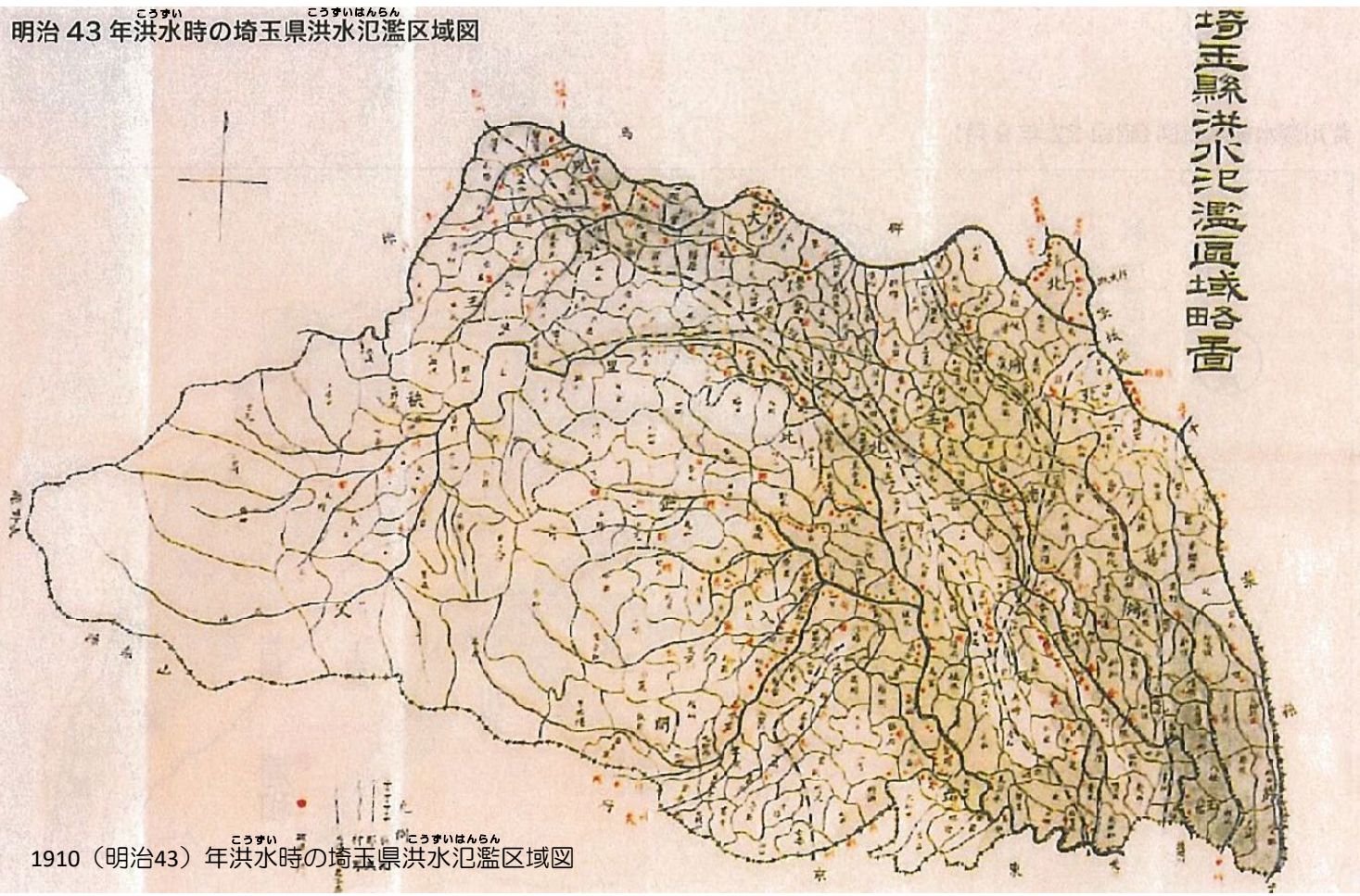


明治43年の洪水 こうすい ～明治政府を動かした大洪水～

明治以降、荒川で最大の洪水。多くの損失により、治水事業は外交政策や財政政策と並ぶ重要な課題になりました。

明治 43 年洪水時の埼玉県洪水氾濫区域図



1910 (明治43) 年洪水時の埼玉県洪水氾濫区域図



明治43年の洪水のようす (川越市)



堤防決壊の光景 (熊谷市村岡付近)

頻発した洪水

1910 (明治43) 年洪水が発生し、荒川にも大きな被害がもたらされました。明治以降、荒川最大の出水となるこの洪水は、利根川の洪水と合わせて埼玉県内の平野部全域を浸水させ、東京下町にも甚大な被害をもたらしました。

記録に残る埼玉県内の被害は、堤防決壊314箇所、死傷者401名、住宅の全半壊・破損・流出18,147戸、非住宅10,547戸、農産物の損害は2,400万円 (現在の資産価値で約1,000億円) にもものぼりました。

かつてない大洪水に、明治政府は「臨時治水調査会」を設け、抜本的な治水計画にのり出しました。

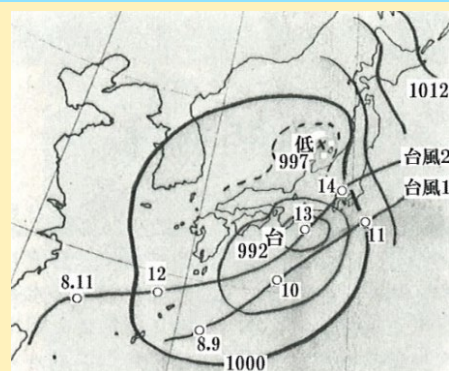
荒川は、国が直轄事業として改修すべき河川に採択され、「荒川改修計画」が立てられました。

▶ 1910（明治43）年洪水の被害の主な被害状況

明治以降、荒川最大の出水となる1910（明治43）年の大洪水は、降水量が1947（昭和22）年のカスリーン台風より洪水規模が大きかったと推定されています。

停滞していた梅雨前線に向かって2つの台風が襲来し大雨を降らせました。「埼玉県の気象百年」によると、1～2日は前線、3～6日は低気圧、7日～11日は房総沖を通過した台風、13～16日は沼津付近から埼玉県西部を通過した台風の影響とあり、1日から16日の降水量は秩父で936mm、名栗（現飯能市）では1,216mmという豪雨でした。

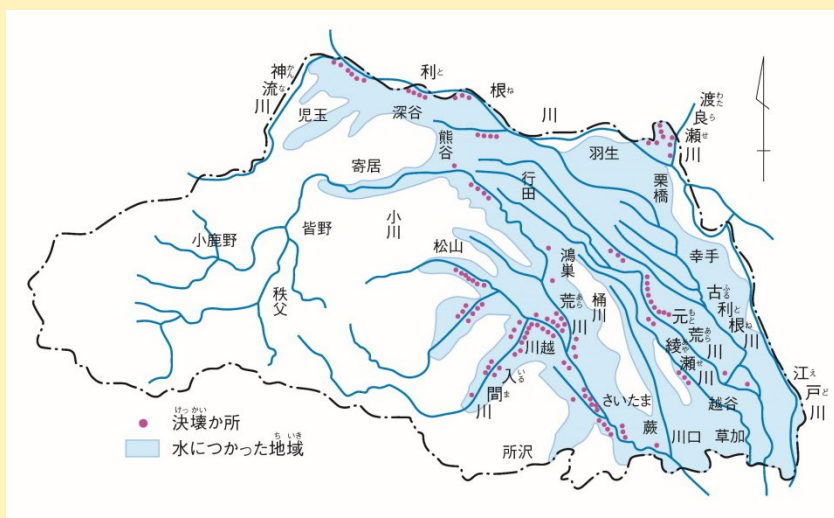
右の天気図は1910（明治43）年の気象要覧等から作成されたもので、8月14日6時時点のものです。2つの台風が通過していることがわかります。



1910（明治43）年8月14日天気図

この大雨により荒川では10日18時30分に左岸の大森生村（現熊谷市）で破堤、右岸では10日夜半から11日朝にかけて吉岡・吉見（現熊谷市）で破堤しました。

埼玉県内では、県西部や北部に人的被害が多く、床上浸水被害が県南や東部低地に多かったのが特徴です。交通や通信網も遮断され、鉄道は7～10日間不通。東京では泥海と化したところを舟で行き来し、ようやく水が引いて地面が見えるようになったのは12月を迎える頃だったそうです。



1910（明治43）年氾濫の図

コラム 明治時代に頻発した洪水

荒川沿川では、江戸時代に頻繁に洪水が発生していましたが、明治時代になっても洪水が頻発しました。1910（明治43）年洪水以外にも、1868（明治元）年～1907（明治40）年の間で、床上浸水などの被害をもたらした洪水は、10回以上発生しています。その中でも、被害の大きかった洪水は、1896（明治29）年、1902（明治35）年、1907（明治40）年でした。特に、1907年の洪水は甚大な被害をもたらしました。

1885（明治18）年7月	大暴風、千住大橋、吾妻橋流失、厩橋破損
1890（明治23）年8月	暴風雨、荒川筋千住大橋辺7尺2寸、千住河原繩手に出水のため臨時汽車にて通行
1896（明治29）年9月	台風、荒川溢水、浸水10余日、荒川・中川・江戸川・綾瀬川の氾濫により、旧葛飾郡一帯と本所・深川方面に浸水
1902（明治35）年8月	豪雨、隅田川その他出水、浅草、本所、下谷、深川、牛入など浸水、隅田川最高水位1丈3尺、荒川筋は平水より1丈7尺増水、北豊島郡赤塚、志村、岩淵、王子、尾久、三河島、南千住の7町村一帯浸水、南足立郡江北、西新井、花畑、千住町で浸水
1907（明治40）年8月	台風、荒川、綾瀬川洪水、隅田川洪水言問堤破堤・溢水、東京市内流失58棟、浸水142,271戸
1910（明治43）年8月	荒川堤防ほとんど全部溢水し、堤防決壊数十か所に及ぶ、岩淵町より志村にかけて出水1丈6尺（または2丈7尺）荒川、利根川の出水により、南足立の全部、北葛飾の北半、南葛飾の西半が浸水

アクセス

吉見堤の碑

1910（明治43）年洪水により決壊した右岸堤防を修復したことを記念した碑

交通：JR上越新幹線・JR高崎線・秩父鉄道 秩父本線「熊谷駅」下車、ゆうゆうバス「長島記念館前」行き、「市田小学校前」下車、徒歩18分

住所：埼玉県熊谷市市島



吉見堤の碑（明治43年大洪水時に決壊した堤防の修復碑）



吉見堤の碑